

虚血心の心機能評価

野村 雅則 藤田保健衛生大学坂文種報徳會病院循環器内科

高齢化社会の到来といわれて久しいが、近年の虚血性心臓病に対する治療法のめざましい進歩、高齢者に対する積極的介入治療の成果もあいまって、虚血性心臓病の病名のもとに治療を受ける人の数は著しく増加した。また、その高齢化も一層顕著となってきた。一方、メタボリックシンドロームが社会的なブームとして取り上げられているように、動脈硬化を加速する環境にさらされている現代の青・壮年者にも虚血性心臓病が発症する危険が今まで以上に増しつつある。このような現状において、虚血性心臓病の診療の主眼は、救命を主たる目的とする発症早期の治療のみでなく、まず予防を、そして発症してしまった後はその後の日常生活の快適さと長期予後の改善に向けられるようになった。

心筋梗塞は虚血性心臓病のなかでも代表的なものであるが、発症直後の急性期から長期の予後を左右する鍵となるのはその心機能障害の程度である。とくに急性期の高度の心機能障害は不整脈などとともに致命的となることも少なくない。心機能の低下は心筋梗塞サイズに大きく依存し、発症ごく早期に心筋梗塞サイズを最小限に留めるためにさまざまな手法が用いられてきた。超急性期の心機能評価にはどの施設においても、ほぼ同じように、心エコーや心臓カテーテルを用いての血行動態評価がなされ、血液マーカーも新しい指標が次々に開発され、汎用されるようになった。心筋梗塞にともなう種々の症状が安定してからは、施設によりその内容は異なるものの、心電図、血液マーカー、心エコーといった非侵襲的な手法のほかに、冠動脈造影をはじめとする冠動脈内イメージングと種々の心臓カテーテル検査、あるいはどの施設でも可能というわけではないが、核医学、MRI などにより詳細に心筋梗塞サイズや心機能が評価されている。これらの情報はその後の入院経過、退院後短期の予後との密接な関係が報告され、急性期重症度評価、あるいは短期予後の推測にすでに多くのエビデンスとして利用されている。

急性期治療成績の向上により多くのひとが救命され、社会復帰が可能となったが、ますます増加するこのような症例での長期にわたる予後の改善、二次予防がこれからの重要な課題となってきた。これまでのような急性期の心機能評価のみでなく、その後の日常生活を過ごしている人々の心機能を正しく評価することが必要となってきた。

虚血心の心機能評価は現実にはそれほど簡単ではない。さきに挙げたような評価のための手段は種々あるが、どの手法によりどんなことが分かるのかについて、その分野におけるオピニオンリーダーの方々による紹介、解説を企画した。おおいに参考になるものと確信している。